■　学校の共通目標

（様式1）

令和２年度学力向上のための重点プラン【小学校】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　新宿区立東戸山小学校

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| **授業作り** | 重　点 | 多様な学習形態を、児童一人一人の実態や課題に即して計画的に取り入れるとともに、形成的な評価を効果的に指導に生かすことで「分かる」授業を目指す。 | 最終評価 | 校内研での一斉指導や個別協働場面の検討、算数での学力向上加配を含めた習熟度別指導などを行うことで、児童の実態に合わせた指導を行うことができ、学習に対する関心の向上がみられた。さらに学力調査での結果につなげていきたい。 |
| **環境作り** | ICTの活用の仕方を検討したり、読書活動の充実のさせ方を検討したりしながら、児童が主体的に学習に参加できる授業の実践を行う。 | 感染症対策を講じて協働的な学習を取り入れたり、ICTを積極的に活用したりすることで、主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。「ICTの活用は手段であること」を忘れずに、教科のねらいに即した効果的な活用を追求していきたい。 |

■　学年の取組内容

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **学年** | **教科** | **令和元年度の定着度調査（１学年を除く）や　　　　　　　　６月以降の学習状況に基づく分析** | **学力向上に向けての児童の課題** | **改善のための取組** | **追加する取組等（12月）** | **年度末の取組評価（２月）** |

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| １ | 国語 | 学ひらがなや拗音・促音など言語に関する習熟の時間が短かったこともあり、文字を書いたり、読んだりすることに課題がある児童がいる。  学感染予防の観点から、ペアやグループで話し合う活動についての経験が少ない。距離を取りながら全体の前で発表する機会は多かったので、そのことへの抵抗感は少ない。 | ・ひらがなの字形はほぼ習得しているが、字形が整っていない児童がいる。  ・文字を書いたり、読んだりすることに苦手意識をもっている児童がいる。  ・話し合い活動の機会が少ない。 | ・文章を書く活動や文章を読む活動を通して、文字や日本語の規則などの理解を高める。  ・ひらがな・カタカナ・漢字など新出の内容の指導を丁寧に取り組み、習熟の機会を多く設定する。  ・感染症対策を講じたうえで、ペアやグループでの話し合い活動を設定し、話し合いの仕方を指導する。 | ・文章を読んで、自分の考えを短い文章で表す。  ・ひらがな・カタカナ・漢字など新出の文字の学習に加えて、習熟の時間をより多く設定する。  ・感染症対策を講じた上で、ペアやグループでの話し合い活動を設定するとともに、簡単なスピーチができるように指導する。 | 学　ひらがなや拗音・促音など文字を正確に書くことができる児童が多くなってきた。一方で漢字やカタカナで書くべき言葉をひらがなで書く児童や拗音・促音を正しく書いていない児童もいるので、文章を書く機会を設定し、継続的に指導をしていく必要がある。  学　話す活動については、例年に比べ、指導の機会が限られてしまった。しかし児童はペアやグループでの活動を意欲的に取り組んでいた。相手に伝わるように、話す事柄や順序を考えて話すことができるように指導を重ねていく。 |
| 算数 | 学具体物操作などの時間が少なかったこともあり、数に関する理解や簡単な計算力が十分身に付いていない児童がいる。  学多様な考えをもつ活動については意欲的に取り組むが、考えを表すことに難しさを感じている児童がいる。 | ・数に関する理解や簡単な計算力が十分身に付いていない児童がいる。  ・解き方など考えを表すことに難しさを感じる児童がいる。 | ・具体物操作やＩＣＴを活用した視覚的な提示を行い、理解を深める。  ・計算の練習を毎日取り組む。  ・考え方を、言葉、図、式など多様な表現が出来るように考えを書く時間を設定する。 | ・ＩＣＴを活用して、個別に自分にあったペースで練習する時間を設定する。  ・考え方をノートに記し、自分の考えや友達の考えを説明できるようにする。 | 学　８割の児童が正確に計算をできるようになったが、正確に計算をすることが難しい児童がいる。計算の練習の機会を増やすとともに、具体物やＩＣＴ機器を活用して個別に最適化された学習の機会を増やしていく。  学　自分の考えをノートに記すことができるようになってきた。苦手な児童には、考えを記すためのヒントを示したり、一緒に考えを表したりする活動を通して、児童の力で考えを表すことができるように指導を重ねていく。 |
| ２ | 国語 | 学登場人物の気持ちを考えたり、主人公が考えたことを想像したりして、発表することが好きである。  学絵を見せながら説明し、友達から質問をしてもらって考えを詳しくすることが好きである。  学授業中の発言、自力解決等意欲的に取り組む児童も多いが個人差がある。  学漢字練習など意欲的に取り組むが定着には個人差がみられる。 | ・休業中の漢字の定着に個人差がみられるので復習を兼ねて漢字練習をする。漢字の書き順が正確でない児童が数名いる。  ・人の前で自分の考えを大きな声で発表することが苦手である児童が数名いる。  ・自由に文を書くことに抵抗のある児童がみられる。 | ・新出漢字を練習する際は、短文づくりを取り入れ、語彙力を伸ばす。  ・発表メモをつくったり、小集団の中で発表したりして、人前で大きな声で話せるように形態等を工夫する。  ・毎週の日記を続け、文をかくことを習慣化させる。 | ・繰り返し反復練習をして新出漢字の定着を図る。  ・日記以外にも詩や手紙など、様々な文を書き、書き方に慣れる。 | 調観点別の正答率を見ると、ほぼ全国平均正答率と横ばいである。物語を読み取る領域は、読書に親しみ本好きな児童が増えてきていることから成長が見られる。カタカナや漢字を正しく書くことは、日頃のテストからも８割近くの児童が正しく答えているが、引き続き指導をする必要がある。  学日常的に文章を書く時間を意図的に設定したことで感想文・説明文・物語文・観察文の違いを意識しながら文章を書く力が身に付けられた。  学朝自習など読書をする時間をしっかりと確保してきた結果、すすんで本を読む児童が増えた。 |
| 算数 | 学計算問題は、よく取り組み、正確に解くことができる。  学授業中進んで手をあげ自分の意見を発表できる児童は限られる。  学自力解決の際に自分の考えをもつことに課題がある。  学家庭学習の取り組みは、ほとんどの児童ができている。 | ・基本的な計算問題を解く際に、解く速さの差が大きい。  ・自分の考えを図や言葉などで表現することに課題のある児童がいる。  ・個別指導を要する児童の割合が多い。 | ・習熟度別指導を展開し、時間配分など、個の応じた指導をする。  ・具体物を使ったり、考えを書いたり話させたりして言語化させ、考えを表現することを支援する。  ・単元のよって習熟度別を行ったり、個別指導を行ったりする。ICTを活用し、視覚化する。また、繰り返し練習を徹底する。 | ・引き続き定着をはかるために、たし算ひき算、かけ算の反復練習をする。  ・大きな数の単元では具体物を使って式を文にすることを練習する。 | 調観点別の正答率をみると、ほぼ全国平均正答率と横ばいである。今後も家庭学習もふくめ反復練習を行い、着実な力を付けていくことが必要である。  学ＩＣＴ機器を活用したり、具体的な操作を行ったりすることで、より児童が問題を自力で解決できるようになった。  学たし算ひき算などは文章題を苦手とする児童が多く、日頃から問題をつくったりみんなで解決したりすることで進歩がみられた。 |
| ３ | 国語 | 調観点別に見ると、すべての項目において、区平均を下回っている。特に、「読む能力」については区平均を８．８％下回っている。内容別に見ると、物語文よりも説明文の読み取りを苦手とする児童が多い。  学物語文を読むことや、図書の時間を活用した読書活動に対して意欲的に取り組む児童が多い。一方で、漢字の読み書きや語彙力の差が大きく、個別指導を要する児童が多い。  授業における学習規律及び家庭学習の習慣がまだ十分に定着していない。 | ・漢字の習得に差があり、既習の漢字を使用して文章を書くことができていない児童がいる。  ・文章を読む際に、叙述に即して読む力が十分に身に付いていない。  ・音読の力にも差があり、文章を正しく読むことができていない児童がいる。 | ・朝学習や放課後学習、家庭学習を活用して繰り返し漢字を練習し、定着を図る。  ・物語文においては登場人物が「見たこと・聞いたこと・したこと・言ったこと・思ったこと」に注目させ、場面の様子や心情の変化を適切に捉えさせる。  ・説明文においては、「はじめ・中・終わり」の文章構成を適切に指導する。また、「問いと答え」の関係を捉えさせ、段落ごとに書かれていることを丁寧に指導していく。  ・授業中や家庭学習で音読を取り入れ、正しくすらすらと文章を読む力を身に付けることができるようにする。 | ・読書においては、朝読書用図書を教室に用意し、読書に親しみやすい環境を整えた。  ・漢字学習においては、テストの前日に習熟を行うことで得点が上がってきた。日頃のノートやワークシートの記述で既習の漢字を使うことができるように意識付けを行う必要がある。  ・物語文においては、場面の様子や心情の変化について、叙述に即して意見を述べる児童が増えた。自分の思いのみで考えている児童には、なぜそう考えたのかを問い返すことで、叙述に即して考えられるようにしていく。  ・説明文においては、文章構成の把握や段落ごとの内容の読み取りについて、サイドラインを用いることで、要旨を捉えられる児童が増えてきた。  ・全ての単元テストについて、観点別の得点分布・平均点から分析を行い、次の単元の指導に生かした。 | 調「話し合いの内容を聞き取る」は目標値より3.3％高い。「漢字を読む」は2.4％高い。一方、「漢字を書く」「言葉の学習」「物語の内容を読み取る」「説明文の内容を読み取る」は目標値より0.9～1.7％低い。後半に出題されていた「文章を書く」については、2/3の児童がそこまで辿り着いていないため目標値を大きく下回っている。物語文や説明文を読んで理解することに時間がかかるため、単元末のワークテストだけでなく練習問題にも取り組み、応用力を付けていく必要がある。  学物語文においては、登場人物が「見たこと・聞いたこと・したこと・言ったこと・思ったこと」に注目することで、場面の様子や心情の変化を叙述に即して読む力が身に付いてきた。説明文においては、「問いと答え」の関係や「はじめ・中・終わり」の文章構成を適切に指導し、段落ごとの内容の読み取りを丁寧に行ったことで要旨を捉えられる児童が増えた。書くことにおいては、主語述語ははっきりしているものの、「すごかった」「おもしろかった」など、内容が抽象的で分かりづらい文章を書く児童がいるため、「いつ・どこで・だれが・何を・どのように」といった項目を意識した書き方を指導していく必要がある。 |
| 算数 | 調観点別に見ると、すべての項目において、区平均を9～12％下回っている。また、目標値にも届いていない。特に、「数学的な考え方」については区平均に比べて12．5％低い。  　内容別に見ると「1000までの数」について、区平均よりも12．5％低いことから、数の構成への理解が十分でない児童が多いと考えられる。  学学習に対して意欲的に取り組む児童が多い。一方で、基本的な知識・技能の習得に差が見られ、個別指導を要する児童が多い。習熟度別指導やICT機器の活用によって、児童一人一人の基礎的・基本的な学力の向上を図る必要がある。  国語と同様に、授業における学習規律及び家庭学習の習慣がまだ十分に定着していない児童がいる。 | ・学習内容の定着度の個人差が大きく、個別指導を要する児童が多い。  ・基礎的な計算問題を解く速さの差が大きい。  ・題意を理解して解決に取り組むことに課題がみられる。言葉の習得に個人差があり、内容を正確に読み取れていない児童がいる。 | ・基礎的・基本的な学習内容の定着度の差が大きいため、習熟度に応じた問題を設定し、問題を繰り返し練習することでその定着を図る。  ・題意の理解する力に差があるため、具体物を操作したり図を使ったりして視覚化することで、内容の読み取りを支援する。  ・どの単元においてもICT機器を活用して情報を視覚化し、具体的なイメージをもって学習活動を進める。  ・朝学習や放課後学習の機会を活用し、既習事項の定着を図る。 | ・習熟度別の学習において、ＩＣＴの効果的な活用や指導事項のスモールステップ化、補習の実施などにより、どの児童も自分のペースで安心して学習に取り組み、基礎基本を定着することができた。  ・計算などの技能面は定着しているが、数の捉え方などの思考面ではとまどう児童がいる。具体物を操作しながら、題意を丁寧に理解させる必要がある。  ・前学年までの学習内容の定着を図るために、単元に入る前の家庭学習や単元の導入において復習に取り組んだことで、既習事項の定着が図られつつある。  ・全ての単元テストについて、観点別の得点分布・平均点から分析を行い、次の単元の指導に生かした。 | 調教科の正答率においては、前年度は目標値よりも5.8％低かったが、今年度は、目標値を下回ったものの0.5％のところまで正答率が上がった。基礎項目については0.6％上回っており、基礎・基本となることは身に付いていると考えられる。内容別の正答率では「たし算・ひき算」や「かけ算」、「長さ・重さ」、「時こくと時間」については目標値を上回った。一方、「１００００より大きい数」や「わり算」、「円と球」は目標値より低く、特に「わり算」は目標値を7.6％下回っている。活用項目について目標値より2.4％下回っているため、文章題などを通して普段の生活の中での活用力を付けていく必要がある。  学習熟度に応じた学習を繰り返し行うことで、基礎・基本を定着することができた。また、毎回の学習において教師用デジタル教科書を活用し、問題場面の視覚化や図形の操作を見せることで、より具体的に場面を捉えさせる手立てとなった。さらに、朝学習や放課後学習において既習事項の定着を図ったことで基礎・基本が身に付いたと考えられる。一方、ワークテストなどにおいて、文章題となると場面が捉えられなくなる児童がいるため、題意を理解する力を付けていく必要がある。 |
| ４ | 国語 | 調活用力については目標値より1.5％高い。物語の内容を読み取ることは８％高い。一方、漢字を書くや言語に関することは5％低い。辞書を活用したり、漢字練習の時に用法を明確にしたりするなど、引き続き言語活動に力を入れていく必要がある。  学心情の変化の読み取りや説明文の要旨など、教科書の叙述に基づいて意見を言えるようになってきている。ノートへの記述や作文など、話型に基づかせたり、書いたものを読み返したりして書き方を指導していく必要がある。 | ・漢字を適切に書いたり、既習の漢字を使って文章を書いたりすることが課題である。  ・順序立てて話したり、要点を押さえて聞いたりすることが課題である。  ・語彙の習得数を多くすることが必要である。  ・文の構造を身に付け、適切に文章に起こすことが課題である。  ・論理的な思考を、文章で表現できるようにすることが課題である。 | ・図書の時間を活用して、読書に親しみ文章に慣れさせる。  ・朝学習や放課後学習、家庭学習を通して漢字の定着を高める。  ・朝や帰りの会、各学習活動の中で、話型指導、聞く姿勢の指導をし、話すこと・聞くことの力を高められるようにする。  ・新出漢字の書き順や用法をノートに書きまとめるようにする。  ・語彙力を伸ばすために、辞書を個別に用意して日常的に調べられるようにする。  ・文章を書く機会を増やして文章力を高められるようにする。 | ・ノート指導として、ワークシートをあえて使わず、それぞれの書く分量に合わせて記入できるようにする。  ・宿題として、言語事項や語彙を増やす課題に取り組ませる。 | 調話合いの内容を聞き取る力、物語の内容を読み取る力、漢字を読む力は目標値と同様または上回ることができた。文章を書くなど主体的に学習に取り組むことは２０％近く低かった。興味・関心が低い内容でも、主体的に取り組む手立てを講じていく必要がある。  学物語の登場人物の心情を想像して書いたり、自分の考えをノートに記述したりすることができるようになってきた。しかし、説明文を構造的に読み取ることなど、思考を組み立てて学習することに課題がある。段落相互の関係や接続詞、主語と述語などの指導を丁寧に行っていく必要がある。 |
| 算数 | 調たし算、ひき算やかけ算については目標値を上回った。基礎・基本となることは身に付いていると考えられる。しかし、１００００より大きい数や時刻と時間、円と球など量の測定や図形に関して、目標値より下回っていた。普段の生活の中で、どう活用していけるのか、応用力をどう付けていけるのかを授業の中で力を付けていく必要がある。  学計算処理など、課題解決方法が分かるものには、意欲的に取り組むことができている。考え方を表現する力を付けていくように、繰り返し指導していく必要がある。 | ・学習内容の定着度の個人差が大きい。  ・文章題に苦手意識がある。言葉の習得に個人差があり、内容を読み取れない児童がいる。  ・時間、長さ、かさ、重さをイメージして考えることが難しい児童がいる。  ・課題解決の方法を考えて表現することが課題である。 | ・習熟度別の学習では、レディネステストを使ってクラス分けを行い、個に応じた問題数で繰り返し練習をし、基礎・基本の定着が図れるようにする。また、児童の実態に即して、発展的な学習もできるようにする。  ・問題の中に生活場面を入れることで、身近なことで習得した学習事項を活用することができるようにする。  ・長さや重さ等、具体的な物を操作する算数的活動を多く取り入れ、具体的なイメージをもって考えられるようにする。  ・単元にとらわれない、継続的な繰り返し学習を適宜取り入れる。 | ・小数のかけ算やわり算など、繰り返し練習することで習得できる内容を徹底的に取り組ませる。  ・ICTを使って、図形の学習など具体的に操作をしながら学習を進めていく。  ・習熟度の高いグループには、なぜそうなるのか思考力を高めるような学習方法や発展的な内容にも触れながら学習を進めていく。 | 調どの項目も目標値を下回った。観点別では知識・技能と主体的に学習に取り組む態度は-５％だったのに対し、思考・判断では-７％と低い。具体的にイメージできる小数や折れ線グラフなどは-２％だが計算のきまりは-１４％とかなり目標値を下回っている。具体的にイメージできるように視覚的に指導したり、繰り返し復習したりしていく必要がある。  学練習問題などの課題に進んで取り組めるようになった。思考力を問われる問題には戸惑いが大きい児童がいる。スモールステップでの指導を行うことで自力解決の力を付けていく。 |
| ５ | 国語 | 調観点別では「書く能力」が不十分で、目標値からは10％、区平均からは11％下回っている。「関心・意欲・態度」については、6％下回っている。前年度との経年変化を見ると、平成30年度は区平均との開きが、わずかではあるが縮まった。  学物語文の読み取りにおいては、登場人物の心情を感性豊かに表現する児童が多い。ワークテストの状況を見ても、一定の成果を上げている。ただ、言語化に関する能力、及び、読解力については、十分身に付いてはいない。 | ・授業における学習規律、及び、家庭における学習習慣がまだ確立、定着していない様子が見られる。  ・授業中の発言、自力解決等、意欲的に取り組む児童が多いが、個人差もある。  ・文章構成や語句の使い方を手がかりに、筆者の主張、主題や要旨を読み取る力がやや不足している。  ・問われていることを的確に捉え、自らが伝えたいことを効果的に表現するための文法（主語、述語、接続詞等）が身に付いていない。  ・漢字の習得に個人差がある。 | ・発問、指示を工夫し、児童同士の充実した学び合いを促せるようにする。  ・話型を活用し、考え・意見を発表し、交流する場を設けることで、児童自らの考えや意見を相手に伝えられるようにする。  ・作文の書き方の基礎・基本の指導を徹底する。  ・説明文の指導において以下のことを重点的に行う  　　・文章構成を捉える。 　・事実と意見を弁別する。  　　・主張や主題を捉える。 ・文法を理解する。  　　・要約文を書く。  ・話し合いや意見を交換する活動を取り入れ、考えを発表する場を作る。  ・音読を繰り返し、聞き手を意識した声の出し方を練習する。  ・朝学習や漢字検定を通して、漢字の定着を図る。  ・毎日、書く活動を取り入れ、自分の考えを表現できるようにする。 | ・単元テストの分析（観点別の得点分布・平均点から）を全単元で行い、次の単元の指導に生かした。  ・特に、考える力、書く力、発表する力、話し合う力、自己評価する力、めあてを設定する力をより一層高めていく。  ・１時間の授業の展開の中に上記の６つの視点を具体化する場面を設定する。  ・学習規律の定着が図られた。  ・課題解決型の学習に対して、学び方が身に付いてきた。  ・正しい文法で、段落を意識した文が書けるようになった。  ・順序を表す言葉や段落の構成など文章を読み取るために必要な事項に着目したり、見付けたりするよう指導する。  ・何のために、何を読み取るかを明確に示した上で、必要な箇所にラインを引かせるなど原因や根拠を探す方法を指導する。  ・疑問に思ったことや、最も重要だと思われる部分などを書き出させる。  ・読み取った内容に対して、自分なりの意見をもたせ、表現させる。 | 調問題の内容別正答率について、前年度からの経年変化をみると、いくつかの観点において正答率が上がった。特に、言葉の学習では、正答率が目標値より５.６％上昇した。昨年度の校内研究から実践している「一人読み」の場面で、叙述に即した自らの読みを言語化させる活動を継続して取り組んだことが効果に表れたと捉えることができる。また、国語科で書く活動を充実させたことはもちろん、他教科・他領域でも、書く活動を意図的・計画的に設定したことが、改善の要因として考えられる。  学学習に対して、めあてと見通しをもち、課題解決に向けて、ねばり強く取り組む姿勢が身に付いた。また、年間を通じて、読書活動の充実に力を入れたことも効果的であった。日々の意欲的な学習姿勢が、各単元のワークテストの結果にも成果として表れている。 |
| 算数 | 調観点別を見ると、数量や図形についての知識・理解以外、すべての項目で、区平均を2～7％下回った。特に、「量と測定」が最も低い結果となり、区平均より28％下回った。また、平成30年度との経年変化を見ると、「図形」の正答率が14％低下する結果となった。基礎的・基本的な内容の習得が十分でないことと、学習習慣が定着していないことが原因であると推察される。  学基礎的・基本的内容の徹底に向けて、スモールステップでの学習、及び、ICT機器の活用が効果的である。児童も意欲的に取り組んでいる。ただ、個別指導が必要な児童が多数いる。学力向上に向けて、習熟度別指導の充実を図る必要がある。 | ・学習規律、学習習慣の定着においては、国語と同様である。個別指導を要する児童の割合が多い。  ・基本的な知識、技能の定着においては、個人差がかなり見られる。  ・問題場面を捉えたり、既習事項を活用して問題を解決したりする力がやや不足している。  ・自分の考えを式や図、言葉を使い説明できる児童が少ない。  ・四則計算が正しくできず、分数や小数の計算でつまずきが見られる。  ・既習事項が十分に定着していないため、完答に結び付くまでに至っていない。 | ・互いに考えを伝え合い、話し合うことにより、自らの考えや集団の考えを高め、発展させられるような授業展開ができるよう工夫する。  ・課題提示を工夫することによって、児童に解決の見通しをもたせ、自ら学んでいけるようにする。  ・算数的活動を工夫することによって、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学んでいけるような学習活動を推進する。  ・学習の振り返りの活動を授業の中に位置付け、成果の確認や次の学習への見通しをもてるように習慣付ける。学習内容の定着を図るため、ドリルやプリント等で繰り返し練習を行う。  ・問題解決型の学習を計画的に取り入れる。  ・問題を数直線や図等に表し、解決させる指導を繰り返し行う。  ・習熟度別の学習ではレディネステストを使ってクラス分けを行い、個に応じた指導をする。  ・朝学習や放課後学習、補習の時間等を使って、基礎・基本の定着を図る。  ・ノート指導を通して、理解が深まるまとめ方を指導する。 | ・単元テストの分析（観点別の得点分布・平均点から）を全単元で行い、次の単元の指導に生かした。  ・特に、問題文の情報を比較したり関連付けたりして読み取る力や、限られた情報から問題の答えを推論して解決する力を身に付けられるようにする。  ・習熟度別指導において基礎･基本の定着を図るために、ＩＣＴの効果的な活用、指導事項のスモールステップ化、補習の実施等、より丁寧な指導を講じる。  ・前学年までの学習内容の定着に向けて、単元の導入に復習に取り組んだことにより、既習事項、基礎・基本の定着が図られつつある。  ・課題解決に向けて、考えを巡らせて解法を探り、ねばり強く解決しようとする姿勢が身に付いてきた。  ・作業的学習を多様に取り入れる。（操作活動、図表の制作等）  ・グループ学習や集団学習を多様に組み込む。（協力して学ぶ場、話し合える場）  ・単元の終末に、学習のまとめ、復習の時間を設定し、学習内容の定着を図る。 | 調問題の内容別正答率では、いくつかの領域・観点において、目標値よりも高い正答率を示した。特に、分数のたし算・ひき算　　　では、目標値よりも３.２％高い正答率となった。学力向上加配の配属により、習熟度別指導、及び、個別指導の充実が図られたことが、学力の向上につながったと言える。また、学習内容の定着に向けた放課後学習（補習）を計画的・継続的に実施できたことにより、基礎的・基本的事項の定着が図られたことも、改善の要因として考えられる。  学日々の学習においては、習熟度別指導による個別指導の充実、及び、ペアやグループによる学び合いの場を多く設定したことも、効果的であった。習熟度別指導、及び、学力向上加配の担当者による、実態分析に基づいた学習材の準備と、専門性に裏打ちされた教材研究、学校全体へのコーディネートが、学力向上を支えた。 |
| ６ | 国語 | 調教科全体としては、わずかではあるが目標値を上回っている。一方で区の平均正答率と比較すると、４％程下回っている。観点別に見ると、「話す・聞く能力」は区の平均正答率を上回っているが、それ以外は平均より低い結果となっている。特に「書く能力」「知識・理解・技能」に関しては目標値、区の平均正答率のどちらも下回っている。基礎的な知識や技能の定着を図ると共に、文章を書く力の向上を図る必要がある。  学意欲的に学習活動に取り組むことができる。手を挙げて、自分の考えや思いを発言する児童も多い。一方で、自分の考えや思いを書くことが苦手な児童が少なくない。また、漢字の書き取りについても個人差があり、個別指導が必要である。読むことに関しては、叙述を基に登場人物の人柄や人間関係について考えることができる。 | ・漢字や言語に関する知識・技能の差が大きい。  ・全体的に文章を書くことに課題がある。目的に応じて読み手に伝わるような文章を書くことが現段階では難しい。  ・読解力に個人差があり、個別の声掛けが必要である。  ・積極的に発言できる児童は多いが、内容を整理して、分かりやすく話せる児童は少ない。  ・相手の話を聞き、正しく内容を理解することに関して課題がある。 | ・漢字の書き取りなど言葉に関する学習を繰り返し行い、習熟を図る。  ・様々な場面において自分の考えを書く場面を設ける。その中で、書き方に関して、具体的に例を示しながら指導する。  ・朝読書をはじめ、読書の機会を設定し、文章の内容を正しく読み取る力を育てる。  ・小グループによる活動など、自分の考えや思いを話し合う機会を意図的に設定する。  ・聞いたことを人に伝えたり、文章に書いたりする活動を取り入れ、目的意識をもって話を聞けるようにする。 | ・プリントなどを活用して、漢字学習の習熟を図る。  ・自分の考えを整理して、相手に伝えることを意識してより具体的にわかりやすく文章を書けるようにする。  ・教室の読書環境を整え、進んで読書ができるようにする。  ・話し合う目的や意図を事前に確認し、目的意識をもって話し合い活動が行えるようにする。  ・物語文の学習では、叙述から登場人物の心情を読み取る学習活動を繰り返し行う。 | 調学力調査においては、基礎、活用共に目標値と区の平均正答率を上回っている。読むことについては、区の平均正答率を５ポイント弱上回っており、読書活動や文章の読み取りを繰り返し行った成果が少しずつ表れてきた。また、情報の扱い方に関する事項についても区の平均正答率を８ポイントほど上回っており、取り組みの一定の成果が見られた。一方で、書くことに関しては、区の平均をわずかに下回っており、引き続き指導が必要であると考える。  学漢字の書き取りについては、これまで漢字に対して苦手意識をもった児童が繰り返し学習を行うことで以前より多くの漢字を書けるようになった。また、文章読解や文章を書くことについても、学習に取り組む前に読み方、書き方やその目的を明確にすることで、よりめあてに沿った学習活動を行えるようになった。 |
| 算数 | 調観点別に見ると、すべての項目において、目標値を下回っている。特に「計量や図形の技能」に関しては目標値を９．５％下回っている。量と測定と図形の領域を苦手としている児童が多くいると考えられる。  学国語と同様、意欲的に学習に取り組む児童が多い。習熟度別で学習を行っているので、自分のペースで学習に取り組むことができている。一方で基本的な知識・技能の習得に個人差が見られ、個別指導が必要な児童も多くいる。ICT機器等の活用や学習形態の工夫を行い、児童一人一人の基礎的・基本的な学力の向上を図る必要がある。 | ・計算力をはじめ、基本的な知識・技能の定着に個人差が見られる。  ・文章問題に対して苦手意識をもっている児童がいる。文章の意味を正しく理解して、問題を解くことができるようにすることが必要である。  ・自分の考えを整理して、分かりやすく説明できる児童が少ない。  ・既習事項の定着に差があるため、個別指導が必要である。 | ・基礎的・基本的な内容を繰り返し行い、その定着を図る。  ・話し合いや意見交換、発表を通して、児童同士が学び合える環境づくりを行う。  ・自分の考えを書いたり発表したりする場面を設定し、児童が目的意識をもって学習活動に取り組めるようにする。  ・掲示等を工夫し、児童が見通しをもって学習に取り組めるようにする。  ・より効果的な習熟度学習や個別指導を行えるように、クラス分けや指導方法などを工夫する。  ・放課後学習等で個別指導を行い、既習事項の定着を図る。 | ・授業や宿題等で苦手な単元を中心とした復習を繰り返し行い、習熟を図る。  ・ICTを活用し、児童がより主体的に学習活動に取り組めるようにする。 | 調学力調査においては、基礎・活用ともにわずかに区平均正答率を下回っているが、目標値はどちらも上回っている。授業や宿題で繰り返し復習を行った成果が少しずつ表れてきた。体積や面積の問題に関しては、区の平均を大きく上回っているが、比の問題に関しては、区の平均を大きく下回っている。今後は、児童が苦手としているところを分析し、より効果的に指導していく必要がある。  学二祖的・基本的な内容に関しては、全体的に理解は高まっているが、一方で応用的なものに関しては、児童間に大きな差があると言える。算数に苦手意識をもっている児童も進んで手を挙げて発言するなど、理会が高まるにつれて前向きに学習に取り組めるようになってきた。今後は、文章問題において、文章の意味が正しく理解できるように指導していく必要があると考える。 |
| 音楽 | ・低学年：音に親しみ、楽しみながら歌ったり、拍の流れにのりながら正しいリズムで小物打楽器を演奏したりすることができる。  ・中学年：きれいな歌声や音色で演奏しようとする姿が見られるが、音楽的な知識や既習内容、技術の定着、思いをもって表現することは十分とは言えない。  ・高学年：個々の技能差が少なくなり、楽しみながら合奏をすることができる。曲想を捉え、自分の言葉で発表したり、思いをもって表現したりすることには個人差が見られる。 | | ・低学年：歌詞等に着目し、楽曲に合う動きを考えたりすることができる児童が少ない。音楽に合わせて身体を動かしながら表現したりすることを恥じらい、取り組まない児童が数名いる。  ・中学年：音楽活動に対しての意欲や技能に個人差が見られる。口をしっかりと開け、積極的に表現したり、厚みのある声で歌ったりすることができる児童が少ない。  ・高学年：旋律やリズムなど、音楽を形作っている要素を根拠にして表現方法を工夫したり、楽曲の特徴を述べたりすることに課題がある。 | ・低学年：楽器の使い方や構え方、歌の姿勢などを毎時間しっかりと伝え、毅然とした態度で指導をしたり、できている児童を積極的に褒めたりする。  ・中学年：個に応じた指導を充実させることで、達成感を味わわせ、学習に対する意欲を高めていく。音楽を表す言葉を掲示し、それらを活用して自分の言葉で発表させたりする。  児童の実態に合った曲を選び、無理のない声で歌わせる。  ・高学年：音楽を表す言葉を掲示し、それらを活用して自分の言葉で発表させたりする。作曲者や教師の思いを伝えることで、楽曲に対する自己のイメージを膨らませる。 | ・感染症対策の点から、十分な距離を取り、歌唱やリコーダー奏に取り組ませる。  ・鍵盤ハーモニカ奏は、オルガンや木琴、鉄琴奏に代替する。  ・既存の学習事項について意識づけながら学習を進めていく。 | ・低学年：楽器の正しい構え方、演奏の仕方を覚え、多くの児童が音に親しみ、歌唱やリズム打ち、鑑賞等の音楽活動を楽しむことができた。  ・中学年：リコーダーや鍵盤ハーモニカを使用せずに合奏に取り組んだり、児童の生活と結び付けた楽曲を使用したりすることで、学習に対する意欲を高めることができた。  ・高学年：個人の考えを全体で共有する時間を多く設けることで、児童の思考を深め、思いをもって表現することのできる児童が増えた。 |
| 図工 | ・図工の時間を楽しみにして、つくり出す活動を楽しんでいる。  ・低学年・中学年：時間を惜しんでつくり続けている。  ・高学年：取り組んだ題材は、必ず仕上げようとしている。学習に見通しをもって取り組む児童が増えてきた。 | | ・立体から平面へ、平面から立体へ、見方を変えること。  ・図工や他教科での既習事項と、現在の学習活動を関連付けてとらえること。 | ・関連する題材(粘土で立体につくったものを絵に表す、あるいはその逆など)を意図的に配置する。  ・全体や個別の指導の際に、既習事項や身近な事象との関連について、常に示唆する。 | ・1つのテーマで立体から平面へ表し方を移す題材を、第2学年、第3学年で実施した。  ・特に、高学年の学習で算数や理科など他教科での既習事項を想起させるよう声を掛けた。 | ・立体に表したものから絵に表す題材を次年度も、年間の指導計画に配置していく。  ・学習の見通しについては、繰り返し示したことで、身に付いてきた児童もいた。引き続き指導する。既習事項や他教科での学習との関連については、結び付けて理解することが難しい児童が多い。今後も繰り返し指導する。 |
| 特支 | ・興味・関心のある活動には進んで取り組むことができる。  ・新しいことができるようになることをうれしいと思っている。 | | ・集中して取り組むことができる時間が短い。  ・自信が持てない活動には、取り組むことが難しいことがある。 | ・活動の内容と取り組む時間を事前に明確にし、見通しをもって活動を行えるようにする。  ・繰り返しの学習を児童の興味・関心を生かした教材で意欲的に続けられるようにする。  ・スモールステップで、自信をもてるところから安心して取り組めるようにする。 | ・ＩＣＴを活用し教材提示の仕方を視覚的に分かりやすく工夫する。  ・集中が持続するように、一単位時間の活動を複数に区切って取り組めるように工夫する。  ・算数など具体物を操作しながら課題を解決できるような授業展開にする。  ・授業の展開をパターン化して、活動内容の見通しを持たせる。  ・児童の興味や実態などから単元計画を工夫し、より主体的に取り組めるようにする。 | ・教材を視覚的に分かりやすく示したことで、児童の興味関心が続き、意欲的に授業へ参加できる児童が増えた。また、一単位時間の授業を複数に区切って取り組めるようにしたことで、集中して学習に取り組むことができるようになってきた。  ・単元計画を工夫したことで、児童がより興味をもって取り組み、少しずつ自信を持たせることができた。児童の興味関心の幅が広いので、より児童にあった単元開発や教材作成が今後の課題である。 |

　　　　　調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況　　　※分量は2ページ以上となってもよい。